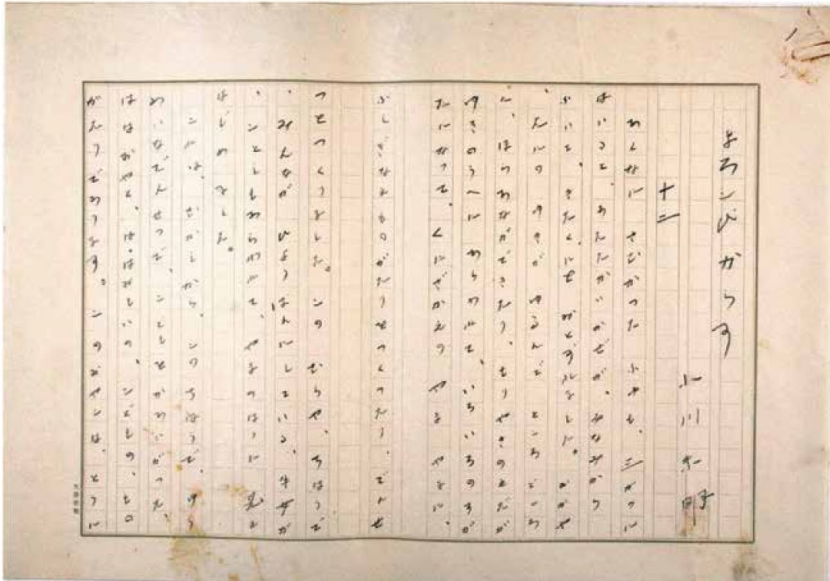


連載童話「よろこびからす」生原稿



小川未明の童話は、ほとんどの童話が一息に読める短編です。創作にかける未明の情熱は、はげしく燃焼するあまり、長く書き継ぐ中編や長編の童話に向かなかったようです。

未明の長編童話としては、「雪原の少年」（「国民新聞」昭和6年（1931）4月18日～6月6日）が知られていますが、内容的には短編童話をつなぎ合わせたようなもので、構成的にも特にすぐれているとはいえません。

ほかに中編童話として、「青空の下の原っぱ」（「週刊朝日」昭和7年（1932）1月3日～1月24日）があります。これは当時の社会問題

を童話にとり込もうとした未明の野心作ですが、やはり十分な成功作とはいええないでしょう。

あまり知られていないことですが、未明は晩年に、中編の連作童話を、下記のとおり、学年別童話雑誌の依頼に応えるかたちで書いています。これらの童話は、子供たちの新学期が始まる4月から学年が終わる3月までの1年間、連載を行うスタイルで書かれたものです。1年の連載ですから、それぞれの童話には、四季の移り変わりに応じた内容が描かれ、各学年の子供の成長過程に見合ったレベルで童話書かれています。また読み手を意識し、多くの男の子や女の子が登場します。

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| 「ふくろうをさがしに」 | 〈初出〉小学一年生 昭和27年（1952）4月～28年3月 |
| 「こもりうた」 | 〈初出〉小学一年生 昭和29年（1954）4月～30年3月 |
| 「遠い北国のはなし」 | 〈初出〉小学三年生 昭和30年（1955）4月～31年3月 |
| 「よろこびからす」 | 〈初出〉小学二年生 昭和31年（1956）4月～32年3月 |
| 「口まねするとりとおひめさま」 | 〈初出〉小学一年生 昭和32年（1957）4月～33年3月 |

当館では、晩年に書かれた「よろこびからす」の生原稿を小川家からお預かりしています。小学館の学年別雑誌「小学二年生」誌上で「よろこびからす」の連載がはじまったのは、昭和31年（1956）4月です（当時、未明は74歳）。未明は、原稿用紙4枚を1回分として童話を連載していきました。12ヶ月の連載ですから、約48枚の分量になります。写真は、最終回（3月号）の冒頭の前稿です。

「よろこびからす」のあらすじは、次のとおりです。天気の良い、よく晴れた日に飛んできて、みんなの心を喜ばせるからすのことを、子供たちは「よろこびからす」と呼んでいました。お乳のでない貧乏な母親のために、げんじいさんが魚を釣りに行ったとき、よろこびからすが鳴いて、じいさんはたくさんの魚を釣り上げます。腕に悪いデキモノが出来た子供の母親が、しげ子のおばあさんから神頼みを勧められ、そのとおりにすると、やはりよろこびからすが鳴いて、子供の腕の病気が治ります。勇吉が東京へ仕事を覚えるにいくとき、げんじいさんは、よい心がけを持つことが大切だと諭します。冬がすぎ、山はだに牛女が表れました。げんじいさんの体が衰えたのを聞いて、東京から勇吉が帰ってきました。これからは自分たちが村の力になり、年寄りを助け、新しい村を作っていこうと勇吉は思います。

生原稿を見ると、未明の衰えが文字に表れているようにも見うけられます。「よろこびからす」の内容も、いささか緊密さを欠いているようです。しかし未明は、それでも子供たちのために童話を書き続けました。助け合い、「よい心がけ」をもつことが大事だと訴えます。そうすれば、よろこびからすが鳴くのだと。